

“ガイジン”のない世界へ

福島県立会津学鳳中学校 2年 中村 文彬

物心がついた頃には、私は既に「ガイジン」と呼ばれからかわれていた。

両親とともに日本人の私に、そのあだ名がついたのは不思議だ。親の都合で引っ越しがちなことに加え、当時の私は顔が少し日本人らしくなく、言葉が遅かったことが原因だろう。そう呼ばれる度に、何とも言えない気持ちだった。今思えば、自分はいくまで「外側の人間」で、皆と同じ内側の人間にはなれないのか、と寂しい思いをしたのだろう。そして、彼らとの間にある壁は大きく、決して乗り越えられないもののように感じたのかもしれない。

去年の夏、私の家は初めてホームステイを受け入れた。受け入れたのは、香港の大学生だ。彼とコミュニケーションを取れるように、事前に必死で英語の勉強をし、香港について調べた。話題が尽きないように、質問を考えた。だが、どれだけ用意をしても不安だった。嫌われないだろうか、文化の違いが原因で不快な思いをさせないだろうか。私は、会ったこともない彼に、恐れを抱いていた。しかし、ホームステイではトラブルは起きず、私はいい意味で拍子抜けしてしまった。彼とは、英語で問題なく意思疎通を図ることができ、夕食の場では、日本のアニメや漫画の話で大いに盛り上がった。その後、彼と英語で楽しくトランプをした。彼に会う前は、私は過剰なほどの恐怖心を持っていたのに、彼が帰った後にはそんな気持ちは全くなかった。生まれた国が違う者同士でも共通点は確かにあり、対話することができるのだ。壁が、少し低くなった気がした。

去年のラグビーワールドカップの日本チームを見ていて、思ったことがある。チームのメンバーの中には出身地が日本ではない選手も多く、彼らの容姿は日本人とはかけ離れていた。しかしそのような選手たちも日本の国旗と私たちの期待を背負い、大会で健闘し、国歌も歌っていた。人種・民族とは、何なのだろうか？私の中の、日本人と外国人の区別が曖昧になったような気がした。そして、そもそも確固たる人種の壁なんてないことに、気づいた。

日本には現在二百八十万人以上の外国籍の住人がいる。彼らの中には、私が幼い頃に外人と呼ばれて感じた、疎外感と同じような気持ちを抱いている人は多いと思う。私は今後、「外国人」という言葉は使わないようにしよう。これらの言葉は、日本人と外国人、自分たちと自分たちの仲間ではない外の人という分断を連想させるからだ。この誤った連想から抜け出すことで、人種・文化の壁は実は大したことはないものだと気づくだろう。未だ根強い差別はあるが、言葉に注意を払えば意識も変わる。悲しむ外側の人がいなくなることが、私の切実な願いである。もし偏った見方に固執し、狭い共同体の中から人を差別する内側の人になるなら、私は「ガイジン」であり続けることを選ぶ。